



第38回 日産 童話と絵本のグランプリ

1が2 2が4 4が8

コウタリ リン

三年生になって初めての体験学習で、ハルタが水族館に行った日だった。家に帰ってくると、となりに住む杉田のお婆さんがいた。

「じいちゃんが、ついさつき病院に運ばれたの、早く行ってあげて！」

かけつけたハルタと母さんがどんなに呼んでも、じいちゃんは目をさまさない。なかつた。

(ひどいや、じいちゃん。おれが水族館のつかい水その前にいるときに、ひとりでいなくなるなんて。バイバイくらい言いに来てくれよ、じいちゃん！)

お葬式の終わった夜、ねむれないハルタは、げんこつでまくらをポスポスなぐりつけていた。すると遠くから水の中みたいなの、くぐもった声が聞こえてきた。

「めんめんめんめんめん 五個のめん で ごめん」

「じいちゃん？」
ハルタはがばつと起きあがる。部屋のみすみすみに、じいちゃんが座っていた。「じいちゃん！」

抱きつこうとしたハルタは、じいちゃんをつきぬけて壁にぶつかった。「痛つてえ……」

「ハルタ だいじょうぶかい？ 今のじいちゃんの体は 見えてるだけなんだよ」

「じいちゃん、うつすら透けていた。急に いなくなつて 悪かつたなあ…… 苦しかつた？ 死ぬとき」

「うーん そうでもなかつたよ。今は、苦しくない？」

「だいじょうぶさ ほれ もう寝よう。ハルタは、じいちゃんとならんでふとんに入った。(じいちゃん) —— なんだい？ (じいちゃん) —— ここにいるよ……」

じいちゃんの声を聞きながら、ハルタは眠りにとけてゆく。

「じいちゃんの家に来たのは、ハルタが三歳のときだ。母さんの仕事がなく なつて、ひとり暮らしとふたり暮らしが合体した。ハルタと母さんの顔を見るなりじいちゃんは言った。
「さあ、まずはメシを食べるぞ。ポ」

ナスでたから、マーボーナス」

ハルタは、じいちゃんといるとほつとして、元気が出ていっぱい笑えるようになった。

お葬式の夜に出てきたきり、三週間以上過ぎたけれど、じいちゃんはあられもない。母さんはいままでよりいそがしくなつて、いつもいらいらしている。じいちゃんが会いに来たことも、言えないままで。

その日は朝から最悪だった。体操服を忘れて取りにもどつたら遅刻した。休み時間、六年生に「のけ」とボールをぶつけられた。給食のおかわりジャンケンで、あと出だと言われてケンカになつた。放課後は青山先生から職員室によべられた。たいへんなことはないかと聞かれたけれど「ぜんぜんない。じょうぶ、あははー」と笑つておいた。

教室にもどつて、ケンスケと遊ぼうと思つていたのに、なにも言わないで帰つてしまつていた。家に着いたらお菓子もジュースもない。ぬるい水道の水を飲む。

部屋中見回しても、じいちゃんは出てこなかつた。ごろんと寝ころがつて、天井ようを見上げる。まぶたが重くなる。

がらがらと玄関の開く音がして、寝ていたハルタは目を覚ました。もう夜遅い時間だ。

つかれた顔で部屋に入ってきた母さんの携帯電話が、ピロピロ鳴り出した。「はい……いえ、はい、すぐもどります」

母さんはテーブルにお金をおいた。「コンビニで何か、買って食べておいて」

それだけ言つて、自転車でもた仕事に行つてしまつた。

ハルタはポケットにお金をねじこんで、くらの道を歩いた。こんな時間にひとり外を歩くなんて初めてだ。

やつと着いたコンビニは、目が痛くなるほど明るくて、お客さんたちはハルタなんか見えていないみたい。買い物をしてる。

(おれ、いない人みたいだ……)
なにも買わずにコンビニを飛び出した。「きみ、ちよつといいかな？」

家の前で声をかけられた。知らない男の人の声だ。ハルタはこわごわふりかえる。

制服姿のおまわりさんだった。うしろには、パトカーがとまつている。胸がドキドキする。

「夜、ひとりでよく出かけるの？」

(ああ、おこられるんだ)
そのとき、ひよいと心配そうな顔が見えた。となりの杉田のお婆さんだ。そのうしろから背の高い影が近づいてくる。

「松本ハルタクんの担任の青山ですが」
そこにやつてきた車から、ケンスケが飛び出してくる。ケンスケのおかあさんも車から降りて青山先生に話しかけている。

キキーツと自転車のブレーキの音。髪の毛をふりみだした母さん。
「ハルタ！ なにがあつたの？」

おまわりさんが母さんに話をする。「パトロール中にひとりで歩く男の子を見かけたので。でも、こんなに見守ってくれる人がいるなら、だいじょうぶでしょう」

パトカーが静かに去って行く。母さんはその場にへたりこんだ。立ち上がるのに手を貸しながら、杉田のおばさんは言った。
「なんだか突然（おとなりさんの、人となり）ってダジャレが浮かんでね、それで松本さんのところ行かなきゃって思ったの」
「私も、今日（ハルタの笑顔は、はるタイプ）とひらめいて最近の笑顔は作り笑いだっただか、と心配になつて」と、青山先生。
ケンスケが茶色い紙袋をさし出した。

「ぼくの特製クッキー。今日持って行くって黒板に書いておいたけど、見た？」
「黒板？ ぜんぜん気がつかなかった」
「おそくなつたけど（クッキーは楽しいクッキー）って言つてたハルタのじいちゃん思い出して、がんばつたよ」
「じいちゃんだ」とハルタはつぶやいた。
じいちゃんが、いろんな人にSOSを出してくれたんだ。

「母さんも、じいちゃんが見えた？」
「ハルタも見えるの？ じいちゃんはいったい、なにしてるの？ この音楽はなに？」
「マンボだよ。じいちゃんはマンボウの上でマンボをおどってるんだよ」
ふぶつと母さんがふき出す。
「マンボウでマンボ？ やつぱりダジャレなの、じいちゃんつたら」
ハルタもじいちゃんをまねて、マンボをおどりはじめる。右足を前に一歩だしてもどす。左足をうしろへ一歩引いてもどす。
「ほら、母さんも」
泣き笑いでステップをふむ親子を、まわりの人たちが不思議そうに見ていた。
マンボウが体をひるがえし、じいちゃんをつけたまま水そうの奥へと泳ぎはじめた。
「じいちゃんー」
のぼした手が、水そうのガラスにぶつかると。あつちとこつち。このへだたりを越えることはできない。だんだん音楽が小さくなる。マンボウの上でお

四十九日の法要の前の夜、じいちゃんがあらわれた。
「法要のあと 水族館に行つてくれんか」
「どうして？」
「マンボをおどるから 見ておくれ」
「見てのお楽しみ」
じいちゃんがニンマリ笑う。
亡くなった人は、四十九日たつたらあの世へ旅立つんだと母さんは言っていた。
「四十九日が終わつたら、もう会えない？」
「そうだな そういう決まりらしい やつぱり。ハルタの体から力がぬける。」

「ハルタ じいちゃんがいなくてもだいじようぶだと 今はまだ思えないかもしれない でも これからきつと だいじようぶになると 思うことはできるだろう？」
じいちゃんを見た。体の色がうすくなっている。ハルタはおなかに力を入

どるじいちゃんが、ぼやける。
「1が2 2が4 4が8 倍倍バライ」
大きく手をふつて、笑つておどりがらじいちゃんはうすくなって、水にとけるように消えた。ちゃんと、あの世へ行けたのだ。
長い時間、水そうの前に立っていた。母さんがハルタの涙のあとを手のひらでぬぐう。
「ねえ……おなかすかない？」
「うん。あれ食べたいな。ボーンヌステから」
「マーボーンヌス！」
ふたりの声がそろつて、また笑つた。
（じいちゃん。あの世で元気だな。おれのところにもダジャレ、飛ばしてくれよな）
「1が2、2が4、4が8、じいちゃん、バイバイ、バライ！」

れた。
「うん。やつていく。母さんと。みんなと」
ひとつ気になることがあった。
「母さんとは、会えた？」
「それがなあ まだなんだよ」

お寺での法要のあと、ハルタは水族館に行こうと母さんを誘つた。そこはじいちゃんがたおれた日に、ハルタが体験学習で来ていたところだ。水そうから陽気な音楽が聞こえてくる。ほかの人は聞こえてないみたいだけど。
「あー！」

じいちゃんだった。じいちゃんがマンボウの上に立って、おどっている。
「へえ、マンボウって大きいのね」
母さんのはのんびりしている。まだじいちゃんが見えていないらしい。
マンボウがゆつくりと、母さんの前に泳いできた。じいちゃんのおどりがはげしくなる。
すると、母さんの目がこれ以上はムリというくらい大きく開いて、口まで開いた。

審査員コメント

この作品からは、人々の「暮らし」が見えてきます。祖父が亡くなり、母と子の二人で生きていかねばならない日々を、友だちや近所のおばさん、先生など、周りの人たちが見守ってくれる展開に、読者は安心して励まされます。祖父のダジャレも実に効果的。

吉橋 通夫

コウタリ リン

アルバイト 京都府

受賞のことば

だじゃれを考えすぎて頭の中が大渋滞。これは不真面目なこと?と考えもしました。でも、私たちは昆布に「よろこ(ん)ぶ」を見だし、マメ(健康)に暮らせるように豆を食べます。幸せを祈る言葉遊びは、心をこめたつくりごとだなあと思います。

受賞歴 第27回・第30回・第35回
日産 雑誌と絵本のグランプリ 佳作
第36回 日産 雑誌と絵本のグランプリ 優秀賞